

暑さも一層厳しさを増した 8 月、私たちは東京を訪れた。この二日間は、先生方そして OB や OG の方々のご協力により、宮城県では経験することの難しいような貴重な体験をさせて頂き、非常に充実したものになったと思う。今回の東京企業大学・訪問の行程の中でも、私は笹川平和財団・ディレクトフォース共催夏季プログラム、外務省訪問の 2 つが印象に残っている。

東京に着いて最初の活動が笹川平和財団・ディレクトフォース共催夏季プログラムだった。初めに笹川平和財団理事長の田中伸男様より IEA(国際エネルギー機関)に勤められていた経験から、海外そして国際機関で働くことの良さ、日本の現在の課題などについてのご講演をいただいた。その後、グループセッションで私達の班は 4 名の方々と意見交換を行った。

一人目は、日本財団で国内事業を中心に活動されている田代純一様だ。田代様からは日本財団の国内における活動について話していただいた。その中で、「熊本地震や東日本大震災のとき、被災者への援助をする」という活動に、私は、一般の行政機関と同じことをしているのではないかと疑問に思った。しかし、田代様の話から日本財団は民間の機関なので、その地域全域に平等な援助をするのではなく、被災して亡くなった方の遺族や行政機関の支援の届かない非公式的避難所など優先すべきところに集中して援助を行っていると感じた。同じ援助といえど、それを、行う組織の性質でその具体的内容は大きく異なるという点が驚きだった。

二人目は、社長業をされている安達公一様だ。ブラジルに十二年在住されていることから、言語やコミュニケーションについて話して頂いた。私は、日本で英語を十分に勉強すれば海外でも会話ができると思っていたが、現地で慣れないとコミュニケーションをとるのはとても難しいのだという。安達様もブラジルでポルトガル語を半年以上勉強されたという。私のように実際に海外での交流をしたことのない人は大海を知らない井の中の蛙なのだと感じた。また、社長として多くの人と関わる安達様から、私の苦手とする人付き合いについてもアドバイスを頂いた。肝要な心が大切であり、相手を観察し、気持ちを理解すること、相手の話もよく聞いて、受け止めた上で自分の意見も明確に伝えることが良い人付き合いや信頼関係を生むのだという。確かに今の私は肝要な心を持つことや自分の意見を明確に伝えることができていなかった。人付き合いはこれから様々な場面で重要となるので、安達様からのアドバイスを活かしていこうと思う。

三人目は、主に海洋生物の保全活動を中心に行われている前川美湖様だ。前川様も安達様と同様に中国やアメリカなどの海外諸国に駐在された経験があり、仕事の内容だけでなく、英語などの言語の重要性について話をされた。好奇心は言語とは別のコミュニケーションの道具だということにはとても共感できた。また、私達の将来についての話も頂いた。驚いたのは将来には現在よりも職種が確実に減るということだ。科学技術の進歩でロボットでもできる仕事は今後ロボットに任せられるようになるという。前川様から、今後どの職業が人間を必要としなくなるかは分からないので、今は社会の変化に対応できる力を身につけ、将来の選択肢を増やすべきだということ学んだ。

最後は、ICU(国際基督教大学)を卒業され、現在は代表取締役の職に就かれている青木庵様だ。青木様からは ICU での経験や、私達の将来へのアドバイスについて話を頂いた。ICU は留学生も積極的に受け入れ、世界各国から日本へ来た様々な人種の人々が通っているため、言語の隔たりも越えて多くの場面で交流できたという。また、私達が将来に向けて心がけてほしいことも話されました。「若い間は失敗しても許される」とよく言われるが、「何故失敗したか」「どうすれ

ば成功したか」を考え、次の成功に繋げることに意味がある、という言葉はこのグループセッションでの対話の中で最も印象に残っている。このプログラムで四名の方の話を聞いて、今は将来の進路を一つにこだわらずに、より様々な分野に目を向けて多くのことに取り組んでいきたいと思うようになった。高校生のときに視野を狭くしてはいけないのだと感じた。

次に二日目の午前中に私達は外務省を訪問した。外務省は日本と海外の諸国の平和・安全・繁栄の実現のために国内外で様々な取り組みをしている。日本を中心に活動しているので、私は日本に職員が集中しているのだと考えていたので、外務省の職員は霞ヶ関の本省に 2500 名なのに対し、海外の諸国に置かれている大使館、総領事館、政府代表部から成る在外公館には 3400 名もいることに驚いた。今回外務省に訪問する際の下調べとして、外務省のホームページを見た。その時に外務省とは、広い分野で活動しているのだなと感じた。近年海外でも問題となっている難民問題や軍縮や核廃絶を推進する活動だけでなく、女性の社会進出促進の取り組みや、オリンピック・パラリンピックに関する政策も外務省が行っており、まさにあらゆる分野で日本と海外を繋ぐ架け橋となっていた。

前日のグループセッションで学んだ「多くの分野に目を向ける」ということは外務省で働くときにも役に立つのであると思った。外務省には二高の卒業生の方が勤務していたので、プログラムとしてその方々との対談が行われた。公務員を目指す私達にとって、現役の国家公務員の方々の話は非常に興味深いものだった。日本の外務本省で働くときにも海外の言語はいくつか話せる必要があるのか私は疑問に思っていた。現在本省で働いている方は英語は必須言語で、その他の特殊言語を話せる人はその国の専門として力を発揮するとのことだった。また、前日のプログラムで安達様から学んだ海外のコミュニケーションの難しさに加えて、日本人は消極的な傾向があり、もっと意見を主張すべきだと卒業生の方は海外の人から言われたという。逆に海外から見た日本人の良い点は、消極的であるが故に、日本は交渉における調整能力が高い点、すなわち柔軟な対応力であるという。私達高校生には日本人のそのような特性を全く理解していなかったので、海外との交流でこのような日本の悪さや良さが分かるのは素晴らしいことだと感じた。外務省を訪問し、二高の卒業生の方の話を聞いて、省庁とはどのような場所でどのような活動をしているのか、海外と日本はどのような違いがあるのか、など多くのことを学ぶことができた。国際機関の一つである外務省を訪れたことは将来の進路を決める材料のひとつになったと思う。

二日間の短い研修であったが実際に海外で働く方々や二高の卒業生の方々からはかけがえのないものを得ることができたと思う。将来私は地方公務員として働きたいと思っていたが、今回の研修を通して、地方に留まらず東京、そして海外にも興味を向けて、将来の進路を決めるための材料をもっと集めていきたい。最後に、素晴らしい研修を企画してくださった先生方、私達のために貴重なお時間を割いていただいた方々に感謝申し上げます。